



写真：石川一氏

# ふるさとは海辺の工業地帯です

## トンボ博士・田口正男先生が語る今年の特徴 一大勢力を誇るシオカラトンボ どこへ消えたかチョウトンボ

2018年の調査結果は、臨海部6種361頭、内陸部・南部等10種734頭、トンボとり大作戦9種587頭、全体14種1682頭の捕獲・標識状況であった。臨海部の6種は過去最低、361頭は例年並みであった。夏の前後のトンボとり大作戦ではある程度捕れていることより、本年の場合、種数の少なさは猛暑が原因である可能性も否定はできない。また、捕獲個体数1682頭は、都市の調査としては膨大な数値、成果だと思われる。

種の内容的にはシオカラトンボが激増した。臨海部だけで、前年134頭から本年257頭へといった具合である。その結果、シオカラトンボが占める割合は、71.2%、二位の種はショウジョウトンボの14.4%となり、シオカラトンボ一強の状態に戻った感じだ。また、シオカラトンボをめぐっては、JVCで尾端の黒色部分が約半分も占める雄が見つかった。加えて、標識による雄1個体の移動の確認もできた。8月18日に本牧市民公園で捕獲標識されたものが、9月3日に2km離れた根岸森林公園で一般市民に撮影されたのである。また、個体数が倍増したため、これに次ぐショウジョウトンボとの間が開き、前年優占種同士として拮抗してきた関係は解消された。

臨海部ではこの2年で1頭しか捕獲されなかったチョウトンボは、再び全体でも捕獲ゼロとなった。長年、本種が多数見られた東京電力でも捕獲ゼロとなり、減少の懸念が増した。また、前年は、ヤブヤンマなど大型トンボの出現が目立ったが、本年はそのようなことはなかった。一方、内陸部を見ると、二ツ池ではコフキトンボ、コシアキトンボなどが着実に捕獲され、今まで目撃できてもなかなか捕れなかったウチワヤンマが、今年は6頭も捕獲された。しかしながら、以前小規模の個体群で確認されていたが前年捕獲されなかたリスアカネが本年も姿を見せなかった。

復帰した東電の池についてトンボ相の状況を解析したところ、ここでもシオカラトンボ急増、夏の総捕獲種数の減少とこの池が今まで持っていた特徴と異なる傾向が現れていた。しかも、それは臨海部全体が直面している特徴もあることに注目される。